

“障害者の権利を守り発達を保障する”

みんなのねがいをつなげるための手づくりマガジン

“しがじん”は、全国障害者問題研究会（全障研）滋賀支部のマガジンです。障害のある人に関わる色々な人のつながりをつくり広げていきたいという願いから生まれました。

# しがじん



## 第7号

全障研ってなに？  
キーワードは発達保障

TAKE  
FREE  
¥0

全障研では、障害者や家族のねがいを大切にし、すべての人の発達を保障するために、いろいろな研究や調査を行っています。各地の取り組みを交流しつつ、一人ひとりが研究活動に主体的に参加しています。

### 出版活動

全障研出版部から月刊『みんなのねがい』と季刊『障害者問題研究』を発行しています。その他、保育や療育、教育、医療、福祉など幅広く書籍を出版しています。

### 支部やサークル

全国の都道府県に支部があり、それぞれの活動をしています。また会員相互に集まって、自由なサークル活動をしています。

### みんなのねがいweb

ホームページでは、全障研のニュースとともに充実した資料とリンク集が。障害者政策や運動も適時アップされています。facebook もあります。

### ●今回の特集は「放課後」

11月15日の第1回連続講座「子どもの生活を考える～障害のある子どもにとってゆたかな放課後とは～」の報告を中心に企画を考えました。

### ●2015年度全障研滋賀支部総会

5月22日（日）13:00~17:00  
男女共同参画センター研修室 A

全障研滋賀支部へのお問い合わせは

eriko@edu.shiga-u.ac.jp(滋賀大学教育学部白石研究室)まで

# 特集

## ゆたかな放課後



報告：2015年度連続講座

### 第1回「子どもの生活を考える -障害のある子どもにとって豊かな放課後とは-」

昨年11月15日（日）13時から16時30分、草津市まちづくりセンターでおこなわれました。日野町障がい児地域活動放課後クラブ「ともだち」の指導員盛井智彰さん（社会福祉法人わたむきの里福祉会）の実践報告と、立命館大学教員黒田学（全国放課後連副会長）さんの放課後等デイサービス（2012年度から制度化）の現状とその動向の報告を受け、その後、参加者からの情報交換・実践交流等を通し学習を深めました。全障研の学習会に初めて参加という方も多く、放課後等デイサービスの事業所や保護者の参加と発言が印象的でした。教師の参加が少なかったことは残念でしたが34名の参加をえました。

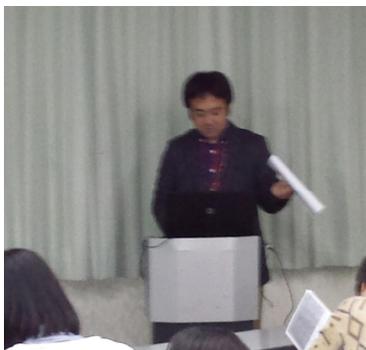
今回は、学習会の案内文の「県内各地に支援センターができ、放課後デイサービス事業の充実など、子どもたちや家族の「生活」を支える条件が少しずつ整ってきています。しかし、障害のある子どもたちが学校、家庭、地域で豊かに育っていくための条件はまだまだ十分だとは言えません。最近では、働くお母さんも増え、また放課後も友だちと一緒に楽しく過ごさせたいと願うお母さんが増える中で放課後保障へのニーズが高まってきています。」「そもそも『放課後保障』とは何を保障するためのものなのか、どこにどんな事業所があるのかなどについて学び、情報交換をしたいと思います。」とあるように、子どもと家族にとっての放課後保障の意味と現状を学ぶこと、デイサービスの仕組みや取り組み方の違いがありながらも、県内に広がりつつある事業所の実態をつかみ、経験等を交流することを目的としました。



放課後クラブ「ともだち」は、小学1年生から高校3年生（特別支援学級・特別支援学校・その他）の16名を定員とし、週2回（水・土）を基本にしています。一方、サマーホリデー等の長期休みやイベント時は定員を設けずに取り組んでいます。また、3年前のサマーホリデーから医ケアが必要な重心の児童が参加し、翌年、他の同様の児童も参加したことから、運営協議会を通じて日野町へ要望し、今年から看護師、しかも八日市養護学校勤務の看護師が配置されることになりました。事務局は盛井さんを中心とした3名、その他、高校生ボランティア129人、地域のボランティア150人、そして、日野町役場が2年目職員の研修として参加しています。

組織として特徴的なことは、地域の人々が支える態勢をとっており、運営協議会には、日野町教育委員会、日野町福祉課、日野町社会福祉協議会、日野町児童民生委員、日野町手をつなぐ育成会、日野町支援学級連絡会、滋賀県立八日市養護学校(PTA地区担当)、滋賀県立野洲養護学校(校区外担当)、わたむきの里福祉会(施設長・事務局)が参加しています。この運営協議会の活動が「ともだち」を支え、地域に根ざす取り組みを保障しています。もちろん、わたむきの里福祉会の「ともだち」事務局スタッフのがんばりを抜きに語ることはできません。「ともだち」の原点が平成元年の無認可施設(日野の里共同作業所)の「日野町サマースクール」にあったことは忘れてはいけません。

## 盛井さんと黒田学さんから原稿を頂きました



### 盛井 智彰さん

小さな頃、家の裏の空き地に「ヒミツ基地」がありました。学校から帰ると、すぐにそこに集まり作戦会議。木の枝や雑草の茎を集めては、基地を守るための武器を作ってヒーローごっこ。時々、学年が上の先輩が威張りながらやってきては、自分たちの知らない武器の作り方や新しい遊びを教えてもらったものです。今だから言えますが、火遊びもここで経験したように記憶しています。大人の干渉を受けないという開放感や自分たちだけでルールや役割を決めていくという醍醐味がたまらなく楽しかったものです。

私の勤める放課後クラブもそんな「ヒミツ基地」の様な場所であってほしいという願いを込めながら子ども達と過ごしてきました。年齢も障害も、持っている力も一人一人違う集団ですが、楽しく遊ぶことについてはどの子もみんなエキスパートです。

国の放課後等デイサービスガイドラインについては、高まるニーズに対して逆行しているように感じます。「経営」という観点が大きく成りすぎると、子ども達にとって居心地のよい場所になるとは思えません。障害特性への配慮や送迎、支援計画、記録作成、保護者対応などで現場職員の業務は目一杯です。実際に「記録業務に追われて子どもと関われない」「支援が個別化していて集団で遊ばせると管理者に注意された」という声も聞こえてきます。一方、ガイドラインを通じて浮き彫りになった課題等については、事業所単独で解決するのではなく、他の事業所と情報共有・連携を図り、制度そのものの課題として捉えていく必要があると思います。まずは福祉圏域ごとに事業所ネットワークが構築されることが望まれます。

また、重度心身障害児への医療的ケア、自閉症を含む発達障害児の支援へのスーパーバイズ、行動障害を作らない取り組み、学齢期以降のライフステージを応援するための仕組み作りなど、放課後・余暇支援に課せられた宿題はまだたくさんあります。友達や安心できる人の中できっと遊ぶという経験が、豊かな人間性を育てる大きな要素だと思います。好きな自分を知り、誰かを信じることを知り、明日があることを知る。すべての子ども達に豊かな放課後を！



## 黒田 学さん

2012 年度から制度化された放課後等デイサービスの現状とその動向について、①あらためて放課後保障の意義とは、何をめざすのか、②障害者権利条約批准に伴う国内法整備（社会サービス全般）と障害のある子どもの放課後保障・余暇保障との関わりはどのようなものなのか、③厚労省が 2015 年度に提起したいいわゆる「ガイドライン」に対して、活動の質、実践の質を高める条件とは何なのか、問題提起を行った。

「障害児支援の在り方に関する検討会」（2014 年 7 月）によると、放課後等デイサービスは、「行われている支援の内容が多様で、質の観点からも大きな開きがある状況であり、支援内容の在り方の整理も踏まえつつ、早期のガイドラインの策定が望まれる」として、ガイドラインが策定された。民間営利企業の参入により障害のある子どもたちの豊かな余暇保障とはほど遠い事業も見られるが、厚労省の狙いは、この 3 年で放課後等デイサービスの総費用が 1000 億円を超えるなかで、利用抑制をかけることが背景にある。

障害者権利条約第 30 条の文化的な生活、余暇への参加の観点から見ると、放課後保障が量的にも質的にもさらに展開されるべきであり、質の低い民間営利企業の参入を招いた厚労省の政策判断にそもそもの誤りがある。ガイドラインは、「子どもの最善の利益の保障」「保護者支援」という積極的な側面が見られる。しかし他方で、「共生社会の実現に向けた後方支援」として学童保育等を一般施策として、放課後等デイサービス（障害者施策）をあくまでも二次的な「後方」と位置づけている点、「事業者向け放課後等デイサービス自己評価表」による「PDCA サイクル」に基づく点検を求めている点は、障害のある子どもたちに対する独自で多様な放課後活動を軽視するものであると言わざるを得ない。

今後の課題は、今年度から学童保育を市町村による条例に基づく運営を定めた点に準じて、放課後等デイサービスの質を向上させるには行政の公的責任を明確にすべきであること、指導員の給与等の雇用条件の向上を図ること、放課後保障を地域社会の子育ての一つの課題として市民社会の合意を得ていくことが重要であると提起した。



### 参加者からの声を紹介します

「他の放課後等デイサービスの状況が知りたくて参加しました。日野町すごいですね。やはり地域で障害児を支えていくのが理想ですね。放課後連という組織を知らなかったのですが、すごく勉強になりましたし、厚生省に対して意見をしてもらえる団体があるのはとてもよいと思いました。もう少し他の事業所の話しが聞きたかったです」

(40代 放課後等デイサービス指導員)

「いつもお世話になっている放課後等デイサービスの現状であったり、課題が理解できました。家庭ではできない経験が積める大事な場所でもあり、家族の生活を保障する場になっているので、さらに充実して行って欲しいと思います。意見に出ていましたが成人期の事業所で過ごして後の時間をどう保障していくか、成人期の余暇支援のあり方も気になりました」(30代 主婦)

「国が放課後デイをどのように考えているか知ることができました。保護者としてはちょっと複雑な心境になりました。日野町のお話は自分が住んでいる行政とは違い、行政と福祉法人とが強力なつながりを持ちすごいなと思いました。しかし、開所が週2回しか開けておられないのは今後の課題ではないかとも思いました」（40代女性 主婦）

事務局では、放課後問題に関し今後も学習研究活動が必要なこと、どのように続けるかは考える必要があること、ライフステージというタテのつながりと24時間のヨコのつながりが大切であること、デイサービスの中身や事業所をつなぐような取り組み、また、さまざまな人と一緒に考えることや企画が大切であること等、話し合いました。



## 見・て・あ・る・記 放課後デイサービス「げんき」

3月末、ぽかぽか陽気の中、草津市にある放課後デイサービス「げんき」に行ってきました。伺ったときは、子どもたちは公園まで出かけていて留守。その間に、代表の前川さんにお話を伺いました。

もともと保育園で仕事をしておられた前川さんは、「生活支援」の重要性を実感しておられました。しかし、特に障害のある子どもたちは、就学後は学校教育だけになり、お母さん方が、働くこともできず、家の中で子どもと向き合う生活になりがちなこと課題を感じておられました。そこで、約2年前に全く手探りの状態から今の事業所を立ち上げられたそうです。「げんき」の由来は、母体となるNPO法人の名称が「元気ずミーオ」であることと同時に、子どもたちだけでなく、保護者もそこで働く人たちもみんな元気でいてほしいというねがから命名されました。

現在利用登録をしているのは、支援学校や市内の支援学級の子どもたち40名ほど。一日の利用者数は10名なので、中には、5カ所の事業所を利用している子どももいるそうです。日によって行く場所や過ごすメンバーが変わるのは、ちょっとしんどいかなとも思いましたが、子どもたち、保護者のニーズと制度の間にはまだまだギャップがあるようです。

話している内に、子どもたちが帰ってきました。一人ひとり好きな場所やおもちゃがあるので、それぞれの場所に陣取って早速遊び始めました。一見バラバラに過ごしているようにも見えてましたが、学校で“がんばって”きた子どもたちにとって、「げんき」は、疲れを癒やし、充電しながら“楽しむ”ところ。みんないい顔でリラックスしていました。そのうちおもちゃを通して子どもたち同士の関わりが始まりました。3時になるとおやつタイム。今日は手づくりホットケーキ。学校の授業のようにみんなが集まってから始まるというのではなく、興味のある子どもから少しずつ集まってだんだんみんなに広がり、途中で抜けるのもありというのんびりした感じがとてもよかったです。この日は、支援学級の小学生ばかりのこじんまりした集団でしたが、かなり年齢幅のある日もあり、子どもたちは集団によっていろんな顔を見せているようです。「げんき」では生活支援も大切にしておられるため、子どもたちはゆっくりたっぷり6時まで友だちとの放課後を楽しんでいました。（文責 能勢ゆかり）



2015年度連続講座

# 「1歳半」の発達を学ぶ

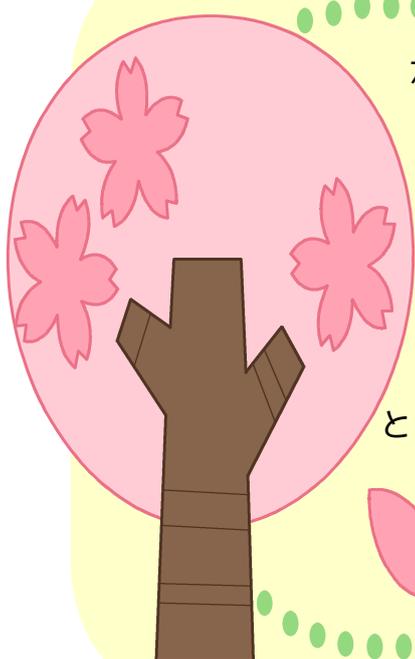
～発達の節目をゆたかに超えるために～

12月20日（日）の午後、学校でいえば終業式直前、世の中的にはクリスマス直前に、2回目の連続講座が開かれました。参加者は25人で、養護学校から9人、支援センターや自立支援施設、保育園、作業所から9人、そして学生さんや保護者+αといった構成でした。前回（第1回・11月15日）の時もそうでしたが、幅広い職種から「今、職場で悩んでいる。」「話を聞きたい。もっと学びたい。」「前回はよかったので今回も期待している。」「知人から『いいよ』と紹介された」などなど、それぞれの思いをもって参加された学習会でした。学ぶ場、学べる場がほしいという要求の高さを改めて実感しました。

初めに、野洲養護学校の大師観世さんから、自らが関わってこられた「Aくんの育ちをみつめる中での発達の捉え方や大切にしてきたこと」について、レポート発表をしていただきました。その後、フリートークで参加者がそれぞれの思いを出し合い、最後に白石先生、松島先生にまとめをお願いするという流れでした。



大師さんのレポートは、Aくんが小学部1年生として入学してくるところから始まりました。環境が変わり、落ち着かないAくんの1日目。Aくんとの関わりについて、担任団で話し合い、何を大事にしていくのかを共通理解し合ったこと。（レポート内では「教師への安心感や、共感関係を築いていくことが大事やなあ。」「指示的な要求だけでなく、楽しいとか嬉しいとかできたとか 思いを持ってほしいなあ。」「大好きな先生や遊びを作って『～したい!』という要求の中で自分の思いを主張してほしいなあ。」と話し合ったことが綴られています。）試行錯誤を重ねながら取り組む中で、身近な大人と大好きな活動を通して、人と一緒であることが楽しいと思えるように変わっていった姿が書かれていました。



その後のフリートークでは、自らの取り組みや実践を振り返りながら、「今自分が関わっている子どもさんも同じような姿を見せていてすごくよくわかる。」「そうした子どもたちが大きくなった職場で関わっている。何を大事にしていけばよいのか考えさせられた。」「子どもたちの小さい時期と成人になってからの時期とで連携して考えることができたら。」「学ぶことが大切だ。」などの意見・感想が話し合われました。最後に白石先生が、「1歳半は、立って二足歩行ができるなど、人の発達にとって大きな節目を迎える時期です。この時期に1次元可逆操作ができるようになってきます。子どもたちが「～ではない。～だ。」と新しい世界を切り開いていこうとする時、大人は子どもたちと信頼関係を築き、見守りながら子どもが成長できるよう寄り添っていくことが大切です。そのために、発達を学び合いましょう。とまとめられました。



Aくんの育ちを見つめ、自分なりの「1才半の『発達』で大事にしたいこと」を発表し、みなさんと語り合い、学びを深める中で、自分の考えに確信を持つことができました。

「大人への安心感や、共感関係を築いていくこと」、「大人と『楽しい!』『嬉しい!』『もっとやりたい!』遊びにたくさん出会い、その思いを膨らませていくこと」、「大好きな先生、遊びを作って、『～したい』という要求の中で、自分の思いを主張していくこと」…担任集団でしっかりと話し合っただけで考えたAくんの課題であり大事にしたいことは、私たちの実践の源となり、Aくんが見せるしんどい姿に揺れてしまう時にも、「それでもやっぱり・・・」と思わせてくれます。

学習会を通して特に印象に残っている言葉は、「子どもの育ちを見る『目』が大切だ。」や「発達を学ぶことが、子どもへの信頼感に繋がる。」です。恵理子先生が、一次元可逆操作について子どもの事例を挙げながら分かりやすく解説して下さい、とても勉強になりました。発達を学ぶことが、子どもを見る「目」を育て、子どもを信頼できることに繋がること、いつも忘れずに心に留めておきたいです。そのためにも、たくさんの仲間と学んでいくことの重要性を感じています。今後とも、このような学べる場や、同僚の先生方と気軽に子どもたちのことを話せる関係性を大事にしていきたいです。

(大師 観世)





# 2016年度もよろしくお願ひします!

最近とみに覚えと集中力が怪しくなり眠たくなることが多くなりました。70歳、80歳越えても頑張ってる人をイメージしながらやれることをやっていきたいです。全障研も新しい人たちに頑張ってもらいたいと思ってます。黒田吉



事務局会議

平均年齢〇〇才。でも気持ちはずっと若いままの事務局です。滋賀支部で取り上げてほしい企画などどしどしお寄せください。能勢

前回に引き続き、失礼します (^\_^;) 今年度から全国委員を務めることになりました。全国の障害者問題をめぐる動向を鑑みつつ、滋賀県が抱える課題に皆さんと一緒に取り組んでいきたいと考えてます! 松島



1月黒田宅で新年会

「全障研」を多くの方々に知っていただき、ねがいにこたえる活動を、みんなで創っていきたい。50回京都大会に、みんなで参加! 森原

若返りを狙う事務局に若さ(精神年齢の)を武器に復活しました。地域のおせっかいなおばさんとしてこれまで以上に関わってきたいです。 黒田恵

